

蘭学事始

● 浅原 義 雄

はじめに



番付4 蘭学奉祝願立番付（寛政10年11月26日の御元会の際の会興として作られたもの。西暦1798年とあるが、1799年元日が正しい）
早稲田大学中央図書館蔵

上図（注1）は江戸時代に制作された『芸海余波』の「蘭学者見立番付」である。誌面の真ん中に大きな文字で「蒙御余沢」とあって、その

下に小さく『皇朝寛政戊午歳十一月廿六日大西洋壹千七百九十有八年「ニューエヤールダク」嘉宴於蔭芝蘭堂社中会衆蘭学花相撲取合興行仕候』と書かれている。現代語に直せば、寛政 戊 午歳（10年）11月26日（陰曆）、大西洋1798年1月1日（太陽曆）に、「芝蘭堂」（大槻玄沢の蘭学塾）において、蘭学者の社中が新年の祝いに集まり、蘭学花相撲の取り合わせ興行を行ったという意味である。大西洋1798年は正確に言えば1799年だが、日本における太陽曆の採用は、明治5年12月3日を明治6年1月1日とした時からであるから、江戸時代の蘭学者はすでに太陽曆の存在を知っていたことになる。蘭学者はオランダ語を通じて外国の事情に精通していたので当然と言えば当然のことであろう。因みに「ニューエヤールダク」をオランダ語で書けば、“nieuw jaar dag”となり、英語の“new year day”にあたる。この一覧表を見れば、当時どのような蘭学者が活躍していたか一目瞭然である。

番付表の中央に、年寄りとして『解体新書』の翻訳をした前野良沢と杉田玄白、勸進元に蘭学入門書『蘭学階梯』を著し、私塾「芝蘭堂」を開いた大槻玄沢、差添に『解体新書』の翻訳仲間である桂川甫周がきて、両端に「当角力の骨、古今の大当たり、芸州、大力士」星野良悦と、「当時在府ニ付、スケ、本家長崎」榎林重兵衛が載っている。星野良悦は我が国で最初に木製人骨を作成した広島堺町の町医者である。榎林重兵衛は今ひとつ人に知られていないが長崎のオランダ通辞である。東大関には日本最初の蘭和辞典『『波留麻和解』』の編集に参加した宇田川玄真、西大関には長崎の通辞で稲村三泊にオランダ語を伝授した石井庄助が一際大きく記載されている。この表はその当時のオランダ語学習者の勢力地図になっており、また蘭学の隆盛を知る上でも貴重な資料となっている。

（1）蘭学黎明期

日本における蘭学の歴史は、江戸時代の外交政策と密接な関係にある

ことは論を俟たない。日本とオランダとの交流は、オランダ商船リーフデ号が1600年（慶長5年）3月16日に豊後国（大分県）に漂着した時から始まる。それまでスペイン・ポルトガル両国が、1543年（天文12年）の種子島鉄砲伝来と、1549年（天文18年）の宣教師フランシスコ・ザビエル鹿児島来訪を契機として、南蛮文化という名の下に日本との交流を深めていた。しかし、1637年（寛永14年）の島原の乱勃発以降、徳川幕府は1639年（寛永16年）にポルトガル船の入港を禁止し、それとともに1641年（寛永18年）にオランダ商館を出島に移して鎖国体制を確立した。従って、江戸時代の日本人が世界の情勢を知る手掛かりとしては、中国・韓国を除けばオランダ語だけが唯一の手段であったと言える。

日本におけるオランダ語の普及に貢献した代表的な人物と言え、通訳業務をしていたその道のプロである阿蘭陀通詞おらんどうじを別にすれば、新井白石、青木昆陽、前野良沢、大槻玄沢等があげられるであろう。新井白石は室鳩巢と同じく朱子学者木下順庵の門下生であり、『読史余論』『古史通』『藩翰譜』等の著書からも儒教的歴史観に縛られた思想家と見られがちだが、ジョバンニ・シドッチへの尋問後に記した『西洋紀聞』『采覧異言』等でもわかるように、その当時では他の追従を許さない西洋に対する該博な知識の持ち主であったことは次の言葉が証明している。

其地球テマリの周囲九万里にして、上下四旁、皆人ありて居オれり。凡、其地をわかちて、五大州となす。一つにエウロパエウローパ、漢に欧邏巴と訳す。某はじめ漢音のごとくによびしを、西人聞て、これを支那チナの音、非也といふ。後にまた阿蘭陀人に問ふに、そのいふところも、亦然也。むかし、我俗、ヨウロウハといひしは、漢音の転じ訛れる也。俗に奥南蛮おくなんぼんといふ地方、即此也。二つにアフリカ、漢に利未亜リウイヤと訳せるは、即此。三つにアジアヤスィヤ、漢に亜細亜と訳するは、即此。○阿蘭陀鐵版の図に拠るに、以下三大州、共に一圈の内にありて、地上界とす。四つには、ノアルト・アメリカ、番語、ノアルトといふは、此には南

といふ、漢には南亞墨利加ナアンヤアメツリキヤと訳する、即此。五つには、ソイデ・アメリカ、ソイデといふは、此に北といふ。漢に北亞墨利加ホツヤアメツリキヤといふ。(注2)

白石はノラルト (noord=north) を南にし、ソイデ (zuid=south) を北として南北を取り違えているが、そんなことは些末な問題であり、鎖国状態にあって外国の文物に触れる機会が極端に少なかった江戸時代においては、一級の外国通であったことは疑いない。白石は非常に知識欲旺盛な人物で、阿蘭陀通辞今村英生からオランダ語の単語三百数十語を習得したりしていることから、通辞以外に最初にオランダ語を学んだ人と言えなくもない。

オランダ語の習得は阿蘭陀通詞だけが許された特権であり、一般の人が見聞きすることは皆無に近かったことは、『蘭学事始』で杉田玄白が述べている次の言葉が証明していよう。

一、国初より前後、西洋のことにつきてはしかじかのことありて、すべて厳しく御制禁仰せ出されしことゆゑ、渡海御免の和蘭にても、その通用の横行の文字、読み書きのことは御禁止なるにより、通詞の輩もたゞ片仮名書きの書留等までにて、口づから記憶して通弁の御用む工弁せしにて、年月を経たり。さありしことなれば、たゞ一人横行の文字読み習ひたしといふ人もなかりしなりき。(注3)

(2) 蘭学上昇期

阿蘭陀通辞は、現代の感覚からすれば通訳業務一辺倒の人間と思いがちだが、医師及び商務官も兼ねており、かなり幅広い業務をこなしていたのである。ただし、通訳としての役目上、外交的な問題は当然のことながら秘密保持が要求されるので誰にでも任せられ質のものではない。通辞の家柄は代々世襲制であり、石橋・秀島・名村・志筑・西・吉雄等

の家を代表として十数家あったとされている。職制も大通辞・小通辞・稽古通辞・内通辞と分かれ、百人近くはいたのであろう。阿蘭陀通辞がオランダ語をどのように学習したかを知る資料として、大槻玄沢の『蘭学階梯』がある。

修学

彼方ニテ、小兒ニ教ル書ニ、「アベブック」「レットテルコンスト」等ノ書アリ。大抵此等ノ教ヘ方ナリ。長崎ノ訳家業ヲ受クルノ初メ、皆先ヅ此ノ文字ノ読法・書法、並ニ綴リヨウ・読ヨウヲ合点シテ、後ハ「サーメンスプラーク」トテ、平常ノ談話ヲ集タル書アリテ、コレヲ云ヒ習ハスナリ。是、其通弁ヲ習フノ始メニシテ、訳家ノ先務トスル所ナリ。是ヲ理會シテ後ハ、「ヲップステルレン」トテ、其文章ヲ書キ習ヒ、先輩ニ問ヒ、朋友ニ索メ、或ハ和蘭人ニモ正シ、其功ヲ積テ、合点スルトキハ、自在ニ通訳モナルナリ。右ノ階級ヲ歴テ学ブハ、本式ノ教ヘヨウナレドモ、長崎ニアラズシテハ成リ難キコトナリ。(注4)

阿蘭陀通辞は「アベブック」(ab-boek, abc-boek=spelling book <初等読本、綴り字教科書>)や、「レットテルコンスト」(letterkonst, letterkunst=grammar <文法>)の教科書によって、オランダ語の発音、文法、綴り字などを学習してから、「サーメンスプラーク」(samenspraak=conversation <会話>)という本で会話を覚え、オランダ語の文章を「ヲップステルレン」(opstellen=draft, draw up <起草する、作成する>)したのである。オランダ語の学習は、阿蘭陀通辞が「これまで通詞の家にて一切の御用向取扱ふに、かの文字といふものを知らず、たゞ暗記の詞を以て通弁し、入組みたる数多の御用をかつかつに弁じて勤め居る」(『蘭学階梯』)のが実態で、一子相伝の口承が中心で門外不出であったと言えよう。その閉塞状態を打破したのが、徳川八代将軍吉宗公である。彼は実学方面だけに限って洋書輸入の禁を緩め、甘藷先生で有名な青木昆

陽や野呂玄丈等にオランダ語の習得を命じたのである。青木昆陽が著した『和蘭和訳』が、最初のオランダ語学習書である。

○和蘭話訳

阿蘭陀ノ声音我国ト大ヒニ異ナレバ、阿蘭陀文字寄合ノ委キヲ阿蘭陀人ヘ尋問スレドモ、口授ヲ専ラトシテ、筆記スルコトアタハズ。其言語我国ノ言ニ比スレバ甚ダ倒シ。且助語多クシテ、会得シ難シ。因テ阿蘭陀話四条、書簡一篇ヲ訳シテ、ソノ大概ヲ示ス。名ヅケテ和蘭話訳トス。

寛保三年三月初五

青木敦書 書印

ik ga uyt om Bloemen te kyken
イキ ガー ウイト ヲム ブルウメン テ ケイケン

イキハ私ナリ。ガーハ行ナリ。ウイトハ出ナリ。ヲムハ為ナリ。ブルウメンハ花ナリ。テハ助語ナリ。ケイケンハ見ナリ。コレハ、私義花ヲ見ンタメニ出行可レ申ト云コトナリ。阿蘭陀ノ詞、我□国ニ比スレバ、スベテ倒スルユヘ、カクノ如ク書ナリ。(注5)

これを現代語に直せば ik (I) uitgaan (go out) om (at) bloemen (flowers) te (to) kyken (kijken=look) となり、英語に直せば” I go out to look at flowers.”となる。こんな簡単な文章でも、オランダ語は英語と違って複合動詞〈uitgaan〉が分離したりして、語順はかなり複雑に倒置する。青木昆陽が「其言語我国ノ言語ニ比スレバ甚ダ倒シ。且助語多クシテ、会得シ難シ」と述べているのも、けだし当然である。青木昆陽は、それから十数年にわたって『和蘭話訳後集』(延享元年)、『和蘭勸酒歌訳』(延享2年)、『和蘭文字略考』(延享3年)、『和蘭文訳』(宝暦8年)等を上梓してオランダ語の普及に貢献する。

その後を受け継いだのが、前野良沢である。前野良沢は中津藩主奥平侯が「和蘭の化物」と称したことから、みずからも「蘭化」と号したほどにオランダ語の習得に腐心した。翻訳の金字塔『解体新書』が、世に出たのも偏に彼の功績である。彼の書『和蘭訳筌』を見てみると、青木昆陽より質が向上しているのがよくわかる。

○前野良沢『和蘭訳筌』

本編

字体・音韻

和蘭ニテ文字ヲ「レットテル」ト云。其数二十六アリ。統テ名テ「アベセ」ト云。是其首ノ三字ヲ取テ、コレヲ称スルナリ。

字体ハ其国字ノ外ニ、「口人）の 国・「イタリアエン」（イタリア人）国等ノ文字ヲ採リテ、コレヲ交ヘ用ルナリ。凡十余種アリ。是篇只初学ノ当ニ先知ルベキ者八種ヲ撰ム。

凡字ヲ画スニ、鵝^{がかく}翻（ガチョウの羽根）ノ本ヲ削リ尖シ、以テ筆ニ代テ用ユ。コレヲ「ペンネ」（penneschaft、羽根ペン）ト 名ク。

予晩学ニシテ、画字ヲ習フニ暇アラズ。姑^{しばらく} 吾邦ノ毫筆ヲ用テコレヲ写ス。故ニ其字様悉ク近似ナル者ニ属ス。閱者^{すべからく} 須^{すべからく} 先コレヲ知ルベシ。

凡書法、左ヨリ^{こうれつ} 衡列（横列）ス。今各字ノ下ニ、吾国字ヲ以テ、字名ヲ附ス。即 A ヨリ起テ Z ニ止ルナリ。……

付録

蘭化亭訳文式

「レットテルコンストノ題言中」

Zeer bekwaam om alle

大 (宣 (適子応 令 諸
寅 得癸 甲

△益

卯

Persoonen in korten tyd op

子○ △ ○ (短不○ (時 (在
乙 及○ 就

丑

戊

de gemakkelykste wyze te

○ 易 簡 法 ○

丙

丁

leeren Spellen Lezen en Schryven.

学 用 読 及 画
習 字 書 字

壬 己 庚 辛

読法 セエル ベクワム オム アッレ ペルソオネン イン
コルテン テイド オプ デ ゲマッケレイキステ ウ
エイセ テ レエレン スペルレン レエセン エン シケレ
イヘン

訳言 △ベクワム (其事ニ適フナリ。其事ニ宜キナリ。此ニハ
学習ニコレヲ言フ。則応ニ益ヲ得ベシト云義トスベシ)。

△ペルソオネン (人の別称。或ハ士ト云フ者ニ似タリ。此ニ義
訳シテ、子ト云フ)。

△オプ (在ナリ。処ノ意アリ。此ニ教学ニコレヲ云フ。則コレ
ニ就クノ義トスベシ)。

〔切意〕 諸子ヲシテ、簡易ナル法ニ就テ、用字・読書及び画字ヲ学
習セシム。応に久シカラズシテ、大ニ益を得ベシ。(注6)

このオランダ文を英語に直訳すれば、'very capable for all persons in short time in the easiest way to learn spelling, reading and writing' となる。前野良沢は文を訳す順序に十干と十二支を用いたり、前置詞・冠詞・不定詞等には○印をつけたりして「蘭化亭訳文式」を考案している。さらに、青木昆陽の書よりも、「読法」(発音)・「訳言」(語意)・「切意」(大意)と明確に分類して、初心者にもわかりやすくしている。教授法が多少進歩しても墨と筆で縦に書く日本字と違って、AからZまでの二十六文字を組み合わせて横書きに書くオランダ文字に、当時の日本人がいかにかに苦慮したかは想像に難くない。しかし、前野良沢のオランダ語訳業は、医学、天文、地理、測量と多岐にわたっている。大槻玄沢は、前野良沢の偉業を「誠二千載ノ鴻業、不朽ノ功」(『蘭学階梯』)と絶賛し、『蘭学階梯』の中で良沢の著書として「和蘭陀訳文略・蘭訳筌・助語参考・蘭語随筆・古言考・点例考・思思未通・菅蠡秘言・仁言私説・八種字考・彗星考・輿地図篇」等を列挙している。前野良沢は「オランダ語の化物」の面目をいかんなく発揮しており、まさにオランダ語啓蒙期の天才と言えるだろう。青木昆陽、前野良沢と受け継がれた蘭学を、万人に知らしめたのは大槻玄沢である。大阪の緒方洪庵「適塾」、長崎のシーボルト「鳴滝塾」、佐倉の佐藤泰然「順天堂」等と同じく、彼は江戸で私塾「芝蘭堂」を開いて、オランダ語を多くの門人に教えた。それだけに一段と初心者理解しやすい形で、次のような入門書を書いた。

○蘭学階梯 (大槻玄沢)

類語

彼方言辞、大凡五万言ノ前後ニ出ヅ。訳辞ノ諸書ニ尽セリ。今、名物ノ類語、若干ヲ左に記シ、傍ラニ仮名ヲ加へ、訳字ヲ附シ、以テ

初学ニ示ス。

ヘルフスト	ロート	ウェスト	ヘーメル
Herfst	Rood	West	Hemel
秋	赤	西	天

ウインテル	ゲール	ゾイド	アールド
Winter	Geel	Zuid	Aard
冬	黄	南	地

(注7)

大槻玄沢が書いたオランダ語のハンドブック的入門書の流れは、桂川甫周の弟甫斎が表したカタカナ表記の平易な教則本と繋がる。

○『蛮語箋』(桂川甫斎)

爰へ来レ	コムト	ヒール		
是ハ不思議ナコト	ダアツ	ウォンデルレイキ		
此名ハ何ト申ス	ウーイス	ナーム		
夫ハ何デゴザル	ワートイス	ダート		
夫ハ高値ジャ	ダーツ	チュールコーブ		
夫ハ下値ジャ	ダーツ	グーデコーブ		
何ヲナサルル	ワート	ヅート	ゲイ	
何ヲ見サッサル	ワート	ソークト	ゲイ	
ナゼ笑ヒンヤル	ワール	ラム	ラクト	ゲイ

(注8)

このカタカナ書きの入門書の表記方法は、幕末に出された中浜万次郎の『英米対話捷徑』(安政六年)や、清水卯三郎の『ゑんぎりしことば』(万延元年)に形を変えて連綿と続く。

(3) 蘭学全盛期

お手軽な入門書とは別に、本格的な辞書も出版されるようになった。

収録語数六万四千三十五語、全十三巻からなる日本最初の蘭和辞典『波留麻和解』（通称『江戸ハルマ』）が出版されたのは、1798年（寛政10年）から翌年にかけてである。蘭和辞典に着手したのは長崎通詞西善三郎だが志半ばで死去してしまい、その意志を継いだのが大槻玄沢門下生稲村三泊である。彼は同門の宇田川玄随、岡田甫説とともに、長崎通詞石井恒右衛門の助けを借りてフランス人フランソワ・ハルマ（Francois Halma）の「蘭仏辞書」（1729年）の日本語訳を作る要領で蘭日辞典編纂に取り組んだ。今までのオランダ語の語順は、前野良沢の『和蘭訳筌』のように、「天・運・日・月・昼・夜・明・闇・寒・温・冷・雲・霧・雨・雪」と恣意的な順序で列挙されたが、ここにいたって初めて「ABC」順に並んだのである。語学の学習で言葉の意味を調べるとき、アルファベット順に配列されていれば、引きやすいことは自明である。この辞書をもとにして、稲村三泊の弟子藤村普山が縮抄版『訳鍵』（文化七年）を出している。この『江戸ハルマ』に刺激されたのか、オランダ商館長ゾーフ（Hendrik doeff）が、ハルマの蘭仏辞書（原書）の第二版をもとに、阿蘭陀通辞等とともに、天保4年に蘭和辞典『ゾーフ・ハルマ』（通称『長崎ハルマ』）を作成した。この『長崎ハルマ』は蘭学の学徒には大いに尊重され、福沢諭吉が『福翁自伝』で書かれているように、適塾の書生が書写するほどに広まった。内容も『長崎ハルマ』は『江戸ハルマ』と比較すると、質的に一段と向上した本格的なものであった。一例を見てみよう。

F. Halma

OPSTAND.z.m. Oproer, wederspanningheid. *Revolte, sedition, rebellion, emotion populaire.*

Men is voor eenen algemeenen opstand bedugt. *On craint ou on apprehende une revolte generale.*

Hier door weird de opstand gevoed. *C'est ainsi qu'on entretint la re-*

bellion.

Opstanding.z.v. Verrijzenis. *Resurrection.*

De opstandinge der dooden loochenen. *Nier la resurrection des morts.*

Wy gelooven de opstanding van het vleesh. *Nous croyons la resurrection de la chair.*

★Opstanding uit de zenden, bekeering. *Repentance, conversion.*

江戸ハルマ

Opstand

闘争

長崎ハルマ

Opstand

一揆 起す事

men is voor eenena lgemeen en opstand bedugt. 人が^{s?} (1字
解読不能一筆者) 一揆起す事を恐れておる。

hier door weird de opstand gevoed. △opstanding.z.v. verri-
jzenis. 死人のよみかへる事

de opstandinge der dooden loochenen

死人の読みかへる [=甦える (筆者注)] 事を信せん

Wy gelooven de opstanding van het vleesch.

*opstandinguitdezonden, bekeering. 返進する事 (注9)

ちなみにフランソワ・ハルマの仏文を和訳すると、“*revolte* (反乱),
sedition (暴動), *rebellion* (反逆), *emotion populaire* (大衆の動揺).
On craint ou on apprehende une revolte generale. (一般の反乱を恐れ懸
念する。) *C'est ainsi qu'on entretint la rebellion.* (かくして反乱が続く。)
Nier la resurrection des morts. (死者の蘇生を否定すること。) *Nous*

croyons la resurrection de la chair. (身体の復活を信じる。) Repentance (悔恨), conversion (改宗).”となる。’opstand (=rebellion, revolt)’を『江戸ハルマ』が、現代的な語感である「闘争」と翻訳しているのは驚きだが、全体的な説明は『長崎ハルマ』に比べると簡略すぎる感は否めない。『江戸ハルマ』は、まともな辞書が一冊もなかった時代に日本人が悪戦苦闘しながら翻訳した辞書であるが、『長崎ハルマ』はオランダ人とプロの通訳である阿蘭陀通辞の手によって完成されたことを考慮すれば比較すること自体が無理であろう。『波留麻和解』の出版以降、幕末の不穏な国情を反映して「露・仏・英・独」等、次のようなヨーロッパ諸語の辞書が世に出る。

- 1796 『波留麻和解』
- 1796 『魯西亜文字集』『魯西亜弁語』
- 1811 『諳厄利亞興学小笈』
- 1814 『諳厄利亞語林大成』
- 1814 『魯語小成』『魯語文法規範』
- 1814 『弘郎察辞範』
- 1816 『長崎ハルマ』
- 1854 『三語便覧』(英仏蘭)
- 1855 『和蘭辞彙』
- 1860 『五国語箋』(英仏蘭露日)
- 1862 『英和对訳袖珍辞書』
- 1863 『独逸単語篇』『独逸文典』
- 1867 『和英語林集成』

(4) 蘭学終焉期

「誠に鱸舵なき船の大海に乗り出だせしが如く」(『蘭学事始』)に、先人達が苦闘しながらオランダ語に立ち向かっていった成果が、その金字塔『長崎ハルマ』で頂点を迎えたといえる。そんなオランダ語全盛期に

冷水をぶっかけたのが、1828年（文政11年）のシーボルト事件である。オランダ商館付き医師シーボルトは、長崎郊外に「鳴滝塾」を開いて高野長英や小関三英等の門下生を教育していた。シーボルトは幕府天文方高橋景保から、クルゼンシュタインの『世界周航記』や『ナポレオン戦史』の交換に、国禁の日本地図（伊能忠敬の『大日本沿海輿地全図』）を入手したことが露見して国外追放の憂き目にあった。高橋景保はその罪によって獄死してしまった。

さらに追い打ちをかけるように「蛮社の獄」が1839年（天保10年）に起こる。蘭学者達が海防目的で蘭学や内外の情勢を研究していた「尚歯会」の会員渡辺崋山は、「慎機論」を書いて幕府の制作を憂慮した。また、モリソン号事件を危惧した高野長英は、「戊戌夢物語」で幕府の異国船打払令に反対した。尚歯会会員であった江川太郎左右衛門に測量手法で敗れた幕府目付鳥居耀蔵は、尚歯会に目を付けて会員を逮捕した。その結果、渡辺崋山は国元蟄居後に自殺し、長英は永牢となり、小関三英自殺してしまった。蘭学の弾圧後、オランダ語を中心にした洋学は、高島秋帆の砲術、江川太郎左衛門の葦山の反射炉、勝海舟の長崎海軍伝習所などに代表される軍事目的とした実学性が一段と強まっていく。

こうした状況野中でオランダ語離れが一段と加速されてしまった。適塾でオランダ語を学んだ福澤諭吉が、1859（安政6年）によって外国人居留地となった横浜の見物に出かけたおり、そこではもっぱら英語が用いられていて看板の文字やビンの貼り紙すら読めないことに衝撃を受け英語に方向変換した次のエピソードにもあらわれている。

今まで数年の間、死物狂いになってオランダの書を読むことを勉強した、その勉強したものが、今は何にもならない、商売人の看板を見ても読むことが出来ない、さりとて誠に詰らぬことをしたわいと、実に落胆してしまった。……………今我国は条約を結んで開けかかっている、さすればこの後は英語が必要になるに違いない、洋学者

として英語を知らなければ逆^{とて}も何にも通ずることが出来ない、この後は英語を読むより他に仕方がない……………（注10）

おわりに

1609年にオランダとの交易が始まって1868年に幕府が瓦解するまで260年もの長い間、日本の国に貢献したオランダ語が、明治新政府になると英語・ドイツ語・フランス語が公用語になったにもかかわらず、オランダ語は除外されてしまった。穿った見方をすれば薩長中心の新政府が、徳川幕府と大変に関係の深かったオランダ語を排除したと考えられなくもない。同じゲルマン語に属するオランダ語から英語への移行は、全く未知の世界への船出ではない。生死をかけた先人のオランダ語学習の歴史的な遺産があったからこそ、明治から今日まで英語一辺倒の世界においても、我々日本人がそれにうまく適合できたのではなかろうか。

注1 『番付で読む江戸時代』296頁

注2 『西洋記聞』29頁～30頁

注3 『蘭学事始』16頁

注4 『洋学 上』357頁

注5 『洋学 上』11頁

注6 『洋学 上』90頁、122頁

注7 『洋学 上』360～361頁

注8 『サムライと横文字』45頁

注9 『蘭和・英和辞書発達史』27頁

注10 『福翁自伝』120頁～121頁

【参考文献】

- ・『番付で読む江戸時代』 林・青木編 2003年 柏書房
- ・『洋学 上』 沼田・松村・佐藤校注 1976年 岩波書店
- ・東洋文庫113 新訂『西洋記聞』 新井白石著・宮崎道生校注 2002年 平凡社

- ・『蘭学事始』 杉田玄白著 2005年 岩波書店
- ・『福翁自伝』 福沢諭吉著 2008年 岩波書店
- ・『蘭和・英和辞書発達史』 永嶋大典著 1996年再版 ゆまに書房
- ・『サムライと横文字』 惣郷正明著 1977年 ブルタニカ出版
- ・『日本におけるオランダ語研究の歴史』 齊藤 信著 昭和60年 大学書林
- ・『洋学』 沼田次郎著 平成8年 吉川弘文館
- ・『江戸洋学事情』 杉本つとむ著 1990年 八坂書房
- ・『江戸長崎紅毛遊学』 杉本つとむ著 1997年 ひつじ書房
- ・『平成蘭学事始』 片桐一男著 2004年 智書房
- ・『新編 おらんだ正月』 森 銚三著 2005年 岩波書店